

「三都賦」小考

——都城賦制作意義の変容とその背景について——

戸高留美子

前 言

西晋期に左思の「三都賦」が完成し世に出されると、洛陽では人々が競ってこれを筆写し広く流布するところとなった。「三都賦」は賦が小品化に向かう流れに逆行するかのようには、漢代都城賦の体裁を踏襲した長編の作品である。自序を見ると作品の模範としての漢代都城賦の影響力を強く感じさせる内容であり、実際に作品の構成や細部の表現など漢代都城賦を模倣する部分が多く見られる。一方で、その題材の選定や制作理念はそれまでにない新しいものであった。漢代の都城賦は華やかな宮廷生活や繁栄を誇る国情を華麗な美辞麗句で述べあげ、ひいてはその主たる皇帝の威容を褒め称えるものであるのに対して、左思は漢代都城賦の虚飾性を批判し、独自の賦観を「三都賦」序で提示している。

題材となった都市に関して言うと、魏の都鄴に加えて漢代の都城賦では取り上げられることの少なかった成都を中心とした蜀と（漢代にも揚雄の「蜀都賦」などがある）、呉の国都建業を中心とした江南地域を題材として扱っている。班固、張衡らが生きた後漢前期、中期からすると賦の作り手である文人達の都市観が変容したはず

である。漢代、世界の中心たる王都が都城賦の主な題材とされ、ありとあらゆる形での都市の權威付けが為された。「両都賦」、「二京賦」は二つの都市の美質を述べあげその聖性や權威を示し対比させるといふ二部構成形式になつてゐる。左思が二つの作品にならない、「蜀都賦」、「吳都賦」、「魏都賦」の三部作として構成出来たことは北方の魏の首都と対比しうるだけのさまざまな都市機能を成都も建業も持ち合わせていたためであると考えられる。「三都賦」の模範となつた「両都賦」・「二京賦」から「三都賦」まで社会情勢の変化に伴う都城賦制作の変容に關し考察したい。

本論では、都市をテーマとし、都市機能、様態を包括的に述べているものを特に都城賦と規定し、『文選』の「京都」部、及び『歴代賦彙』の「都邑」部に採録されている作品について取り上げた。

I 「三都賦」に先行する都城賦の制作状況

漢代都城賦、特に左思は「両都賦」と「二京賦」を「三都賦」の模範として名を挙げるが、それらと「三都賦」との間に都城賦の有用性に対する認識や制作意図に關していかなる差異があるのか。「両都賦」・「二京賦」はそれぞれ次のような経緯を経て完成された。

後漢明帝期に班固により制作された「両都賦」の場合、次のように制作動機が明言される。⁽¹⁾

臣窃見海内清平，朝廷無事。京師修宮室，浚城隍，起苑囿，以備制度。西土耆老，咸懷怨思，冀上睠顧，而盛称长安旧制，有陋洛邑之議。故臣作兩都賦，以極衆人之所眩曜，折以今之法度。（『文選』卷一「兩都賦」序）

臣窃かに見るに海内清平にして、朝廷無事なり。京師に宮室を修め、城隍を浚くし、苑囿を起こし、以て制度を備ふ。西土の耆老、咸怨思を懷き、上の睠顧を冀い、而して盛んに長安の旧制を称し、洛邑を陋とする

の議有り。故に臣両都賦を作り、以て衆人の眩曜する所を極め、折くに今の法度を以てす。

国都洛陽の整備が進む中、長安出身者の間に宮都反対の声があがり、彼らの誤りを論破しようとしたと、「両都賦」制作動機が明記される。岡村繁氏によると、班固は私的に国史を編纂した罪に問われていたところを救われた上に、蘭台令史に起用されたためかねてから漢王室を擁護する態度をとっていたという³。「両都賦」もまた、「明らかに、当時洛陽で大々的に進行しつつあった後漢王朝の新首都建設を全面的に肯定し、賛美するためのものであったと考えられる。」⁴というのだ。

一連の事件が班固の内面にいかなる影響を与えそれが賦の制作にどう作用したか、岡村氏の論に対して筆者は何ら論じる余地がない。しかし作品の構成や内容を見ると、作品全般にわたって漢王朝の繁栄と徳を言祝ぐ表現に徹し、作品の終章に朝廷を賛美する乱を添える構成である。「両都賦」序文において「諷諫」の理念が取り上げられてはいても実質的に作品は王朝の賛美に終始しているのである。

遅れて和帝永元間に書かれた「二京賦」は作品の体裁を「両都賦」に倣っているながらも、後漢王朝の中興を見、王侯以下奢嗜に流れる世相を批判するものであった。

時天下承平日久、自王侯以下、莫不踰侈。衡乃擬班固兩都賦，作二京賦，因以諷諫。精思傳會，十年乃成。

〔後漢書〕卷四九「張衡伝」

時に天下は承平日久しく、王侯より以下、踰侈ならざるなし。衡乃ち班固の「両都賦」に擬して、「二京賦」を作り、因りて以て諷諫す。精思傳會して、十年にして乃ち成る。

「諷諫」を標榜しつつ諸般の事情により王朝を称揚する「両都賦」を書いた班固に対して、張衡は真摯な批判精神によつて「二京賦」を制作したのであった⁶。張衡はこの「二京賦」に限らず、政治腐敗に対する批判を繰り返し

ている。

班固と張衡、両者の政権に対する評価態度は対極的なものである。しかし「両都賦」と「二京賦」を比較すると制作には異なる背景があるものの、共に当時の政権に対して、あるいは作品の読者に対しての政治的アピールを賦作の目的としていた。その根底となっていたのは政治思想的理想論であったため都城賦の舞台は国内で最も大きく壮麗で、皇帝の居所であり世界の中心である国都でなければならなかった。

魏にいたつても都城賦制作において政治的意義が完全に除去されたわけではなかった。政治色の強いチームの一つでもある「諷諫」に限って論じたい。「諷諫」の理念は「両都賦」の序でも賦作の意義として持ち出されているものであるが、魏建国後も形式的に賦制作の場に導入される場合もあった。例えば明帝が青龍三年（二三五）詔を下して劉劭に制作させた「許都賦」、「洛都賦」について見てみる。

（劉）劭嘗作趙都賦，明帝美之，詔劭作許都、洛都賦。時外興軍旅，內宮宮室。劭作二賦，皆諷諫焉。（『三国志』卷二一魏書劉劭伝）

（劉）劭嘗て趙都賦を作り、明帝之を美^よみし、詔して劭に許都、洛都賦を作らしむ。時に外に軍旅を興し、内に宮室を営む。劭二賦を作り、皆^{これ}焉を諷諫す。

当時許昌や洛陽では相次いで大がかりな宮殿建設や修復が行われていた。『三国志』魏書卷三明帝紀、および注引の「魏略」にこの時の模様が次のように記されている。

是時、大治洛陽宮，起昭、陽太極殿，築綵章觀。百姓失農時，直臣楊阜、高堂隆等各數切諫，雖不能聽，常優容之。（『三国志』卷三魏書明帝紀）

是の時、大いに洛陽宮を治め、昭陽、太極殿を起て、綵章觀を築く。百姓農時を失い、直臣楊阜、高堂隆等

各しばしば数切に諫め、聴くこと能わずと雖も、常に之を優容す。

太子舍人張茂、以呉、蜀數動、諸將出征、而帝盛興宮室、留意於玩飾、賜与無度、帑藏空竭。…乃上書諫曰…。〔『三国志』卷三魏書明帝紀注引『魏略』〕

太子舍人 張茂、呉蜀數動き、諸將出征す、而れども帝盛んに宮室を興し、意を玩飾に留め、賜与度無く、帑藏空しく竭く。…を以て乃ち上書し諫めて曰わく…。

朝臣である楊阜、高堂隆らは農民が徵用され農事に支障が出たため宮殿建築を取りやめるよう諫言を呈し、太子舍人張茂は蜀と呉との抗争が止まないことを理由として、上書して宮殿修築を諫めた。劉劭伝に「劭作二賦、皆諷諫焉」とあるが、もともと皇帝から勅命を受けての賦作である。漢代の司馬相如や王褒、東方朔らの作品のように皇帝の娯樂として作品が供せられたわけではなかったにせよ、劉劭も皇帝の要求を満たすために二つの賦を制作したのであった。こうした経緯からすると、制作動機として引かれる「諷諫」はむろん純然たる政治批判とは考えにくい。しかしながら一方では宮殿造営に批判的であった朝廷内の雰囲気への配慮が不可欠であったとも想像される。この「劉劭伝」に見えるように、劭の賦もまた「諷諫」の文脈で受容されたことが伺われるのである。

Ⅱ 国都から地方都市へ、都城賦の題材と主題の変容

都城賦制作の動機として漢代的教義付けが形骸化しつつも踏襲されたが、その教理を具象化するための都城賦の題材は多様化する。先述の揚雄の「蜀都賦」など一部の例外を除いて漢代では長安と洛陽が主な都城賦の題材となっていたものが、建安期以後地方都市も着目されるようになる。建安期から魏にかけて曹氏政權下へ地方出身の文人達が流入したため、中には作者の出身地の都市を題材にした都城賦も制作される。

【表①】

魏		作者(出身地)	題名	
	徐幹(北海)	齊都賦※	都市	
	劉楨(東平)	魯都賦※	臨淄	
	劉邵(邯鄲)	趙都賦※	曲阜	
		許都賦	邯鄲	
		洛都賦	許昌	題名のみ『三国志』魏書劉邵伝にあり。
	吳質(濟陰)	魏都賦	洛陽	佚文
		蜀都賦	鄴?	佚文
西晋	左思(臨淄)	魏都賦	鄴	佚文
		吳都賦	建業	
		蜀都賦	成都	「蜀都賦」「吳都賦」「魏都賦」の三部作
		齊都賦※	臨淄	

※…作者の出身地、もしくははその州治

于浴賢氏は『六朝賦述論』第二章京殿苑獵賦において、地方都市が取り上げられた背景として建安期から三国時代にかけての文人の移動に関し次のように述べる。

地方性藩国都会成为一时京都赋的描写对象。…曹魏政权下的文士多出生、活动于北方、他们对于斯长于斯的故土家园特别熟悉，有者特殊的感情，很自然会加以关注和表现。因此齐人徐干作《齐都赋》、鲁人刘楨作《鲁都赋》、赵人刘劭作《赵都赋》。

曹氏政権下に各地から文人が流入したこと、そして集まってきた文人達が「自らの親しんだ地方都市を賦の題材として選んだ」ために地方都市も都城賦の題材として取り上げられるようになったと于浴賢氏は論じているの

である。⁽⁹⁾

また廖国棟氏は、『建安辞賦之傳承与拓新・以題材及主題為範圍』（第三章建安辞賦題材之傳承与拓新）において、都城賦の内容と題材の行き詰まりについて述べる。

都邑類是漢賦的大宗，班固〈兩都賦〉、張衡〈二京賦〉，更是描寫京都之極致，透過它們，舉凡漢代京都之形勢、帝畿之環境、城郭之樣貌、市集之繁榮、宮殿之瑰璋、畋獵壯觀、遊樂之盛況、節日之禮儀等等，真是包羅萬象。：建安在前賢登峰造極的傑作之下，實在難以超越，但仍努力創作了七篇，僅比漢代少三篇。：都是歌詠其故鄉都城，上承揚雄〈蜀都賦〉、張衡〈南都賦〉，下啓左思〈三都賦〉，完成其傳承的使命，拓新其稍微有所不足。

廖氏は首都を扱った都城賦は、「二京賦」、「二京賦」によって最高点に達した後、飽和状態となり新しい題材を開拓する必要に迫られていた」と論じる。⁽¹⁰⁾

題材の新たな模索が始まった中で地方都市を題材にして漢代的政教色の強い都城賦が再生産されたとは考えにくい。国都から地方都市へと都城賦の題材が多様化した原因として于氏の指摘する「文人の移動」という実際的な現象に加えて、廖氏の論ずるように賦の作者達は対象物に関する知識が豊富で実情を熟知していた各自の出身地を都城賦の題材にするより他なかつたのである。両氏の指摘する環境上の問題により都城賦そのものに対する認識や都城賦の制作意図に変化が起つたのではないか。

文人たちは実情をよく知る都市を題材にしてより詳細で実際的な表現を試みたのである。仮に漢代同様、王朝の称揚を制作の第一目的としていたならば地方都市を題材とする意味合いは薄れるのではないか。前掲の「兩都賦」序に述べられるように、かつて都市はそれも首都の称揚は国策擁護や王朝の権威付けを直接的な目的として

いるものであった。そうあればこそ張衡は「二京賦」において退廃的な都市の風俗を描き墮落した世相を批判し得たのである。ところが建安期から首都やそれに準ずる都市の持つ優位性よりも、情報量その他において創作のために好都合な地方都市を題材に扱う利便性が優先される結果にいたる。裏を返せば都市に象徴される強大な国家権力の誇示、あるいは国威を保持するための政治的理想論の表出は都城賦の第一義的位置づけではなくなったのである。¹¹ こうして都城賦の制作意義と政治思想とは直接的な結び付きを失っていった。「三都賦」は都城賦の有性が政治思想的制約から独立して認識される土壌があつたために、独自の賦観を提示し得たのである。

もつとも「三都賦」賦作において漢賦的な政治色が全く皆無であつたとは言えない。左思は家格も低く容姿も振るわず、齊で鬱屈した日々を送っていた。妹左芬の宮中入りを契機に洛陽に入った後は「三都賦」を十年の間を費やして制作する一方で、官人として文人として栄達のために奔走している。¹² 貴重な典籍に触れる機会を得るため秘書郎の職を求めたり、張載を訪ねて不案内な蜀の事情を尋ねたりして「三都賦」の内容により実証性を追及する一方、賈誼の二十四友の一人となつた。¹³ また、「三都賦」が完成すると寒門出身者を支援していた張華の許に出向き、作品の評価を請うている。人生の展望をかけた「三都賦」制作にあたり権力者への迎合もやむを得なかつたであろう。実際「魏都賦」の終盤で「日双麗、世不兩帝」と魏を褒め魏より禪譲を受けた晋朝の称揚を潜ませる。

しかし作品の序において左思は漢代都城賦のように「諷諫」の名目を借りることもなく、実証主義的見地に立ち「対象物の実態に即した写真」と「典籍による実証」などの、政治思想とは独立した観点から賦制作の意義を提示する。¹⁴ 左思が先行作品を意識しながらも新たな都城賦を如何に作り上げたか。「三都賦」の序では自ら次のように述べる。

然相如賦上林而引「盧橘夏熟」，楊雄賦甘泉而陳「玉樹青葱」，班固賦西都而歎以出比目，張衡賦西京而述以遊海若。佞稱珍怪，以為潤色，若斯之類，匪啻于茲。考之果木，則生非其壤。校之神物，則出非其所。於辭則易為藻飾，於義則虛而無徵。且夫玉卮無當，雖寶非用，侈言無驗，雖麗非經。〔文選〕卷四「三都賦序」然れども相如上林を賦して「盧橘夏に熟す」を引き、楊雄甘泉を賦して「玉樹青葱たる」を陳べ、班固西都を賦して歎ずるに比目を出すを以てし、張衡は西京を賦して述ぶるに海若を遊ばしむるを以てす。佞も珍怪を稱し、以て潤色を為し、斯くの若きの類、啻に茲のみに匪ず。之を果木に考うるに、則ち生ずるやその壤に非ず。之を神物に校するに、則ち出ずるやその所に非ず。辭に於けるや則ち藻飾を為し易く、義に於けるや則ち虚くして徵なし。且つ夫れ玉卮ぎよくし当なければ、宝と雖も用に非ず、侈言驗無く、麗と雖も經に非ず。

左思は「三都賦」の規範とした漢賦に対し、自らの標榜する理念、「写实」と「実証」の観点から手厳しい批判を加え辭句の彫琢をこらした漢賦の表現の虚飾性を実状と反した虚しいものであると批判する。左思が指摘するところの虚飾は漢代都城賦にとって不可分な命題であつたがそれを左思は断罪したのである。この漢賦への批判の言葉こそ左思が新しい観点から都城賦制作にあつた証となるのではないか。

余既思摸二京而賦三都。其山川城邑則稽之地図，其鳥獸草木則驗之方志。風謡歌舞，各附其俗。魁梧長者，莫非其旧。何則發言為詩者，詠其所志也。升高能賦者，頌其所見也。美物者貴依其本，讚事者宜本其実。匪本匪實，覽者奚信。〔文選〕卷四「三都賦序」

余既に二京に摸わんと思つて三都を賦す。其の山川城邑は則ち之を地図かんがに稽え、其の鳥獸草木は則ち之を方志に驗す。風謡歌舞、各其の俗に附く。魁梧長者は、其の旧きに非ざるなし。何となれば則ち言に発し詩を為る者は、其の志す所を詠むなり、高きに升りて賦を能くする者は、其の見る所を頌むるなり。物を美むる

者は其の本に依るを貴び、事を讚むる者は宜しく其の実に本づくべし。本に匪ず實に匪ずんば覽る者奚ぞ信ぜん。

こうした左思の意向が汲まれたのか、典籍による実証性の高さは完成当時から好評を博し、当時の文人達がこぞって注や序などを付した。

劉逵注吳蜀而序之曰、「觀中古以來為賦者多矣，…至若此賦，擬議數家，傳辭會義，抑多精緻，非夫研覈者，不能練其旨，非夫博物者不能統其異。世咸貴遠而賤近，莫肯用心於明物。斯文吾有異焉，故聊以餘思為其引話，亦猶胡広之於官箴，蔡邕之於典引也。」（『晋書』卷九二左思伝）

劉逵吳蜀に注し之に序して曰く「中古以來賦を為る者多きを觀る。…此の賦の若きに至りては、數家を擬議し、辭に傳き義に会い、精緻の多きを抑う、夫の研覈なる者に非ざれば、其の旨を練ること能わず、夫の博物なる者に非ざれば其の異を統べること能わず。世咸遠きを貴びて近きを賤しみ、肯えて心を物を明ずるに用うることに莫し。斯の文吾異とするところ有り、故に聊か余思を以つて其の引話を為し、亦なお胡広の官箴に於ける、蔡邕の典引に於けるがごときなり。」と。

陳留衛權又為思賦作略解，序曰，「余觀三都之賦，言不苟華，必經典要，品物殊類，稟之凶籍。辭義瓌璋，良可貴也。…其山川土域，草木鳥獸，奇怪珍異，僉皆研精所由，紛散其義矣。余嘉其文，不能默已，聊藉二子之遺忘，又為之略解，祇增煩重，覽者闕焉。」（『晋書』卷九二左思伝）

陳留の衛權又た思の賦の為に略解を作り、序べて曰く「余三都の賦を觀るに、言は苟の華ならず、必ず典要を経、品物類を殊にし、之を凶籍に稟く。辭義瓌璋、良に貴ぶべきなり。…其の山川土域、草木鳥獸、奇怪珍異なり、僉皆精の由る所を研し、其の義を紛散す。余其の文を嘉し、默すこと能わざるのみ、聊か二子の

遺忘を藉み、又た之の略解を為り、祇煩重を増さば、覽る者焉れを闕そこなうのみ。」と。

「蜀都賦」と「呉都賦」に注を付けた劉逵は「三都賦」の内容が資料による裏付けが為され深い教養にささえられたものであると褒め、さらに衛権や張華、皇甫謐らも同様の評価をあたえている。皇甫謐の書いた「三都賦序」は次のように評価する。

作者又因客主之辭，正之以魏都，折之以王道，其物土所出，可得披図而校。体国經制，可得按記而驗，豈誣也哉。（『文選』卷四五「三都賦」序）

作者は又た客主の辭に因り、之を正すに魏都を以てし、之を折むるに王道を以てし、其の物は土の出せる所にして、図を披らいて校すを得べし。国を体ち制を経むるは、記を按じて驗を得べく、豈に誣ならんや。

張華の評価により「三都賦」はたちまち洛陽都下大いにもてはやされ、洛陽都下一家に一本を備えられるほど流布したのは類書としての有用性が認められたためとの議論もすでに先賢によりなされている。¹⁶後に都城賦制作の動機はますます政治思想から離れてゆく。鮑照の「蕪城賦」も『歴代賦彙』卷三七「都邑賦」として採録されているが、作品の規模、性質などからすると単純に比較し得ないが、ここにはもはや儒教的政治思想の具現化を念頭に置く漢賦的色彩は一切見られない。班固らが美辞麗句をもつて褒めた繁華な都のあらゆる象徴を逆説的に取り上げ、荒廃した都城の情景を叙情的筆致で書き綴る。都市が強大な国家権力の象徴から叙情的表現のモチーフへと転化されたものではないだろうか。

V 結語

「三都賦」は、長篇都城賦の最後の作品とも言うべきもので、作品の規模や体裁など、漢代都城賦と共通する部

分も多い。しかしその制作理念は後漢から魏晋にかけての新たな都城賦観に立ったものである。具体的には漢代の都城賦に課せられた「諷諫」という政治的理念による制約からの独立がその一つである。左思は「三都賦」を書くにあたり、「写実性」と「実証主義」を新たな都城賦制作の意義として提唱した。すでに都市が政治理念の投影の場ではなく即物的な観察物と化しており、そこへ左思は科学的な視座から都城賦に次なる展望を見出そうとしたのである。

蜀は早くから独自の文化が育っていた。また、江南地域に関して言えば漢人世界そのものが後漢初期からすると格段の広がりを見せ、呉の建国に伴い漢人による大都市建業が建設される。呉は後漢初期のように華北の知識人たちにとって認識の圏外に置かれていたのではなく、既存の自文化のフィールドとはまだ同化もしていないもののやがて同化にいたるべき新天地として展開していたと考えられる。前述のように都市への認識が変容した後であれば、新興都市建業も、都城賦の題材として取り上げることができたのである。「三都賦」はこうした都城賦に関する文学理念的な位置づけの変容と、時期を同じくして進行した政治的経済的な社会の変動とが両輪となって作り出され世に受け入れられたものと考ええる。

注

(1) 「両都賦」の成立年代に関して、鄭鶴声氏は永平七年(六四)と推定する(『班固年譜』中国史学叢書一 上海商務印書館 民国二十一年 四二頁〜四三頁)。また、『後漢書』卷四〇班固伝に次のような記述がある。

自為郎後、遂見親近。時京師修起宮室、濬繕城隍、而関中耆老猶望朝廷西顧。固感前世相如、寿王、東方之徒、造構文辞、終以諷勸、乃上兩都賦、盛称洛邑制度之美、以折西賓淫侈之論。

「両都賦」制作は班固が郎となっていた頃のこととなる。また、『後漢書』卷二四 馬援列伝に「永平十五年、皇后使移居

洛陽。顯宗召見，嚴進對閑雅，意甚異之，有詔留仁壽闈，與校書郎杜撫、班固等雜定建武注記：。」とあり、以上の記述から明帝の永平年間と言える。しかし、『文選』卷一「兩都賦」序、李善注の記述はこれと異なり、「自光武至和帝都洛陽，西京父老有怨。班固恐帝去洛陽，故上此詞以諫。和帝大悅也。」とある。和帝永元元年、班固は大將軍竇憲の中護軍となるも匈奴に大敗、免官されている。ここでは『後漢書』の記述に従う。

(2) 『文選』卷一「兩都賦」序、及び前掲注一『後漢書』班固伝。

(3) 岡村氏は『漢書』編纂にあたる班固の態度について次のように論じている。

思うに、班固は、入獄以来上述のような曲折を経た末に、ようやくにして明帝から認められ、父業の続修を許可されたわけだが、こうした場合、いわば地獄で仏にあつたような班固にしてみれば、漢室の殊遇に特別な謝意を表するためにも、漢王室を最大限に光輝あらしめるべく、みずからの史書の編制に一大変革を加えざるを得なかつたのではなかつたか。そして、彼のこの新しい編述態度は、とりもなおさず、当時における漢室中心の絶対主義に彼が身ぐるみ迎合したことを意味するものにほかならない。(班固と張衡―その創作態度の異質性―)『小尾博士退休記念中国文学論集』一九七六年三月)

(4) 前掲注(3)。

(5) 『後漢書』卷五九張衡伝。

(6) 前掲注(5)。

(7) 『文選』に採録されているもう一つの張衡作の都城賦、「南都賦」は南陽を称揚することにより南陽出身の光武帝を称揚するものと筆者は考える。張衡は政治、社会に対し文学活動を通して鋭い批判を行う一方で、こうした作品も書いていたのである。

(8) 前掲注(7)の「南都賦」の他に『歴代賦集』卷三二に揚雄の「蜀都賦」がある。両作品ともに作者の出身であるが、「南都賦」は南陽出身の光武帝および後漢王朝の称揚が作品制作の目的であると考える。

(9) 『六朝賦述論』河北大学出版社 一九九九年十月 第二章京殿苑獵賦 第三八頁〜第三九頁。

(10) 『建安辭賦之伝承与拓新・以題材及主題為範圍』文史哲大系 文津出版社 二〇〇〇年九月 第三章建安辭賦題材之伝

承与拓新 第二〇四頁。

(11) 『歴代賦集』巻三八「都邑」部に阮籍の「東平賦」が採録されている。内容、表現対象となった東平郡の実態など諸般の事情を勘案すると、ここで取り上げてきた都城賦との同列化はむずかしいのであるが、かなり短編化されたとはいえ都城賦のモチーフをあたかも逆説的に取り入れる様な手法で、東平郡の環境を皮肉っている。この「東平賦」もちろん都城賦の題材たる都市の神聖性を探る姿勢はなく、あるのはただ諧謔的とも言えるようなアイロニーを含んだ視線である。

(12) 復欲賦三都、会妹芬入宮、移家京師、乃詣著作郎張載訪岷叩之事。遂構思十年、…自以所見不博、求為秘書郎。(『晋書』巻九二 左思伝)

(13) 賈謐の二十四友の出身、氏名等は以下の通り。

渤海石崇歐陽建、滎陽潘岳、吳国陸機陸雲、蘭陵繆徵、京兆杜斌摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粹、襄城杜育、南陽雛捷、齊国左思、清河崔基、沛国劉瓌、汝南和郁周恢、安平牽秀、潁川陳昉、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉輿劉琨皆傳會於謐、号曰二十四友、其餘不得預焉。(『晋書』巻四〇 賈謐伝)

また、『晋書』左思伝には賈謐に請われ『漢書』を講じたとの記述が見える。

秘書監賈謐請講漢書。(『晋書』巻九二 左思伝)

(14) 『文選』巻四五「三都賦」序。『世説新語』文学篇注引「左思別伝」では、「三都賦」完成前に皇甫謐が没している可能性から皇甫謐作の序を偽作としている。しかし『晋書』左思伝に「安定皇甫謐有高誉…謐称善、為其序。」とあり、『文選』に皇甫謐作の「三都賦序」が採録されているため皇甫謐序偽作説はとらない。

(15) 前掲注(13)、(14)。

(16) 袁枚『随園詩話』で引「左思別伝」は、「両都賦」、「三都賦」に描かれた内容が豊富で典籍を集成しているため、類書的な要望から広く流布したと述べる。

古無類書、無志書、又無字彙、故三都兩京賦、言木則若干、言鳥則若干、必待搜輯群書、広採風土、然後成文。…洛陽所以紙貴者、直是家置一本、当類書、郡志読耳。(袁枚『随園詩話』巻一)

(とだか るみこ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程)